

写像理論の内と外：前期ウィトゲンシュタインにおける 世界の限界について

吉 永 和 加

L'intérieur et l'extérieur de la théorie de la représentation de l'image : les frontières du monde dans la première période de Wittgenstein

Waka YOSHINAGA

Sommaire

Wittgenstein proclame invariablement que les problèmes philosophiques doivent disparaître par la critique du langage. Il finit son premier livre *Tractatus logico-philosophicus* après avoir indiqué les frontières du monde dans la théorie sur la représentation de l'image, par ces mots très célèbres : « sur ce dont on ne peut parler, il faut garder le silence ».

Cet essai a pour objet d'établir les frontières de « ce dont on ne peut parler » selon la théorie de Wittgenstein et de rechercher la position de ce dernier qui détermine le solipsisme en étendant le réseau logique sur le monde et en l'identifiant à son monde. La théorie de Wittgenstein peut aussi révéler les Mystiques, c'est-à-dire le sujet, l'autre personne et le Dieu, dont Wittgenstein ne mentionne jamais les contenus.

Mots-clés

forme de la représentation, substituabilité, proposition négative, sujet, solipsisme

はじめに

ウィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』から『哲学探究』にかけて「転向」を果たしたことになっている。だが、彼の哲学に対する態度は変わっていない。それは、「哲学」は消え去るべきであるということ、そしてそれは言語を厳密に解することによってなされるということにおいてである¹。他方で、ウィトゲンシュタインは哲学そのものを捨て去ることなく、すべての哲学は言語批判であり、不鮮明な思考を論理的に明晰なものとし、限界を確定する活動だと述べている(4.112)²。「哲学は思考可能なものの限界を示し、それによって思考不可能なものの限界を示さねばならない。哲学は、思考可能なものを通して内側から思考不可能なものを限界づけねばならない」(4.114, 強調は引用者)。この限界づけの後、『論理哲学論考』は次の有名な文言で閉じられる。「語りえぬものについては、沈黙していなければならない」(6.54)。

我々の課題は、前期ウィトゲンシュタインの写像理論において、思考可能なものの「限界づけ」とそれが「内側から」行われる、ということの意味を明らかにし、「語りうるもの」と「語りえぬ

もの」の境界を確定することである。「論理は世界を満たしている。世界の限界は論理の限界でもある」(5.61)。我々が問題にしたいのは、この「限界」である。この言述が問題であるのは、限界を描出し、その内側に留まろうとするならば、少なくとも一度は、その外側に身を置いて限界の内と外を眺めねばならないからである。ウィトゲンシュタインはそのことを十分に知っている。彼が、世界の外部を否定し、限界の内側に留まろうとしながら、その限界を踏み越えることによってしか世界と論理を描けないジレンマをいかに潜り抜けるのか、我々の関心はそこにある。

第一節 世界と論理の写像

そこで本節ではまず、ウィトゲンシュタインの写像理論における「世界」を概観し、それと対応する「写像」のあり方と両者の関係およびその真偽を検討する。

世界の成り立ち

ウィトゲンシュタインによれば、モノすなわち対象が、世界の实体 (substance) を構成する (2.021)。対象は合成されたものではなく、単純で自立的なものであり、時間と空間と色彩という形式の下、不変で存在し続ける。対象は、その「内的性質」 (internal property) のうちにすべての状況の可能性を含んでおり³、その可能性が対象の形式になるという (2.014, 2.0141)。「対象が与えられるならば、我々には同時にすべての対象が与えられる」 (5.524, 強調はウィトゲンシュタイン)。この諸対象の結合が「事態」 (state of affaire) であり、諸事態の成立が「事実」 (fact) である。ウィトゲンシュタインにおいて、「世界」 (world) とは諸対象の配列という変化しうるものによって構成される、諸事実の総体である。

しかし、一言で「世界」といっても、この時点で「世界」は三つに区別されうる。すなわち、現実の世界と、想像の世界と、実体としての世界とである。現実とは、諸対象が鎖の環のように互いに繋がり合い、特定の仕方互いに関係し合う諸事態の成立および不成立である。この成立と不成立を含む現実の全体が「世界」と称される。想像の世界とは、可能的な世界であり、何か或る形式を現実と共有してさえいれば、現実と異なってもよい。これらに対して、世界の实体は、事実の成立いかんによらず独立して存在する。それゆえ、世界の实体が規定しうるものは、実質的な現実世界のあり方ではなく、諸対象が結合する構造の可能性、すなわち形式のみである。

写像の成り立ち

こうした世界を像 (picture) が写し取る。この写像によって、我々は或る事態を思考することが可能となる。像の成り立ちは以下のようなものである。まず、像は、論理的な空間において作られ、状況、諸事態の成立と不成立とを表わす。像は諸要素から成り、それぞれの要素が対象に対応し、対象の代わりとなって、互いに特定の仕方に関係し合うことで成立する。モノとモノは、像の要素と同じ仕方結び合っており、写像形式とは、この関係の仕方の可能性を示すのである。この要素の結合が「構造」と呼ばれ、構造の可能性が「像の写像形式」 (pictorial form of the picture) となる (2.15)。像は「測量機器のように」現実にあてがわれ、現実の対象に目盛りの両端が触れる、という仕方現実に触れている (2.1512)。このとき、像と現実「写像形式」を共有していると言われる。そして、写像が論理的足場 (logical scaffold) に依って立つ限りで (4.023)、現実像と論理形式を共有し、そのすべてが像に写し取られうる。それゆえ、あらゆる像は「論理像」 (logical

picture) となる (2.181)。

では、実際に、世界を表現する像は、いかなる形態を取るのか。ウィトゲンシュタインによれば、像とは命題 (proposition) である。命題は、可能な状況を射影する知覚可能な「記号」(sign) から成り、世界を表現する。この命題によって、思考もまた、知覚可能な仕方では表現可能なものとなる。「思考とは意味を持った命題」であり (4)、「諸命題の総体が言語である」(4.001)。思考に含まれる諸対象は、命題記号の諸要素に対応する。この命題記号の要素をウィトゲンシュタインは「単純記号」と呼び、これがすなわち「名」(name) である。名は対象を指示し、命題において対象の代わりをし、対象を意味する。「諸対象はただ名づけられることができるだけである」(3.221、強調はウィトゲンシュタイン)。名は原始記号 (primitive sign) であるから、分解することは不可能である。「名を定義を用いてそれ以上解析することはできない」(3.26)。他方で、記号は、使用されることによって、記号が内包しているものを表わして、記号のみでは表現されえないことをも示しうる (3.262)。あくまでも「命題のみが意味を持つ」(3.3) のであり、「名はただ命題という文脈の中でのみ、意味作用を持つ」(ibid.) のである。

他方で、上の議論を逆転させると、命題はこの単純記号としての「名」へと分析可能であり、その分析によって複合的な命題の意味が確定されうる。複合的な記述においては、命題中の要素が複合的なものを表わして、意味が不確定なままでもありうるからである。ウィトゲンシュタインは、「命題には完全な分析がただ一つだけ存在する」(3.25) として、命題は原始記号の意味内容の「解明」によって明らかにされるという。ただし、この解明は記号の意味を「既によく知る人によってのみ」なされうるという (3.263)。注意すべきは、命題の解明という重要な局面において、解明する主体らしきものと、その主体の経験が挿入されていることである。これは後で問題になる点である。

写像の命題を成り立たせるものについての概観を続けよう。ウィトゲンシュタインによれば、命題における「名」に続いて命題を成り立たせるのは「要素命題」(elementary proposition) である。要素命題とは最も単純な命題であり、名の連鎖から成って、一つの事態の成立を「主張する」(4.21)。要素命題は、他のいかなる要素命題とも両立可能であり、名はただこの要素命題の文脈でのみ現れうる。要素命題が真である場合にはその事態は成立し、偽である場合はその事態は不成立であるという仕方では、世界はすべての真なる要素命題の列挙によって完全に記述される。一般命題の理解は、こうした要素命題の理解に依存しているのである。

像の真偽と思考

だが、命題が真であったり偽であったりするの、ひいては論理像が真であったり偽であったりするの、いかなる訳であろうか。そもそも像は、事態の成立・不成立の可能性、すなわち論理空間における可能的状況を描写する。像が描写する状況が成立可能であるということは、翻ってそれが成立不可能でもありうるということである。それゆえ、像の成立・不成立、すなわち像の真偽は、現実との一致・不一致に送り返されることになる。「像は現実と一致するかしないかである。すなわち、正しいか誤りか、真か偽かである」(2.21)。命題には、射影するすべてのものが属しているが、射影されるものは属さない。つまり、像は描写内容、すなわち現実の事態から独立しており、像の真偽を確認するためには、像と現実とを比較する必要がある。「像は、それが描出する内容の真偽からは独立に、その写像形式によって描出する」(2.22)。それゆえ、「ア・プリオリに真である像は存在しない」(2.225)。

我々は、ここで再び主体の問題に遭遇する。現実と論理像とを比較して、像の真偽を判定するた

めには、それらとは別の立脚地、別の視座が必要になるからである。もっとも、ウィトゲンシュタインは「この本で論じられえない唯一のものとは、主体である」(5.631)、と述べるので、主体については言語の限界にまで議論が進んでから検討するとして、その手前の「思考」の位置づけを見ておこう。彼によれば、思考とは、事実の論理像である。「或る事態が思考可能である」とは取りも直さず、我々がその事態の像を作りうる、ということである(3.001)。それは思考される状況が単なる可能性であることをも含んでいる。つまり、偽であることも思考可能である。ただし、像は論理形式に基づくゆえに、我々は非論理的なものを思考することは不可能である。「実のところ、『非論理的』な世界がどのようなものであるかなど、我々には語りえない」(3.031, 強調はウィトゲンシュタイン)。

かくして、論理像と現実とは単に論理形式を共有するのみで、互いに独立であり、思考は論理像の側において像と外延を同じくする可能性が高い。だとすれば、問いが繰り返される。像と現実との一致と不一致を判定するのはいかにして可能なのだろうか。この問いは開かれたまま繰り返されて、最終節で論じられることになるだろう。

第二節 論理の世界

以上が、写像理論の概観である。論理命題においては、名が対象を持つことと、要素命題が意味を持つことが前提されている。命題は、要素命題へ、さらには名へと分析されるのであり、その名は対象と対応し、命題の像は論理形式を梃子に現実と対応する。つまり、写像理論そのものは、分析と類比関係から成立している。そのあり方は、フーコーの言うところの中世から近代のエピステーメーを引き摺っているように見える⁴。しかし、近代のそれとの決定的な相違は、ウィトゲンシュタインにおいては、フーコーが予言する主体としての「人間の死」⁵を先取りするかのように、主体が明示されず、むしろ積極的に隠されていることである。

本節の課題は、このような写像理論を踏まえて、諸命題の構造に分け入り、この「主体」を含めて、ウィトゲンシュタインが「語りえない」と見なす限界にまで、命題の「内側から」迫ることである。そこで、本節では、この命題論理の展開を追い、そこでいかなる操作が遂行されるのか、その際、現実の世界と論理の世界との関係はいかなるものかを検討し、さらに論理展開の法則としての因果法則の是非と確率の問題に考察の歩を進める。

命題の展開

ウィトゲンシュタインによれば、「命題のみが意味を持つ」(3.3)。上でも見たように、命題は、要素命題へ、さらには単純記号すなわち名へと分析されて、その意味が確定される。だが、命題の意味とはいかなるものだろうか。ここでは、意味という観点から、命題の構造を検討する。

ウィトゲンシュタインは、命題の意味を特徴づける命題の各部分に「表現」(expression)あるいは「シンボル(表現)」(symbol)という名を付す(3.31)。「シンボル(表現)」とは、命題の意味にとって本質的で、諸命題が共通の部分として持つものを指す。そして、このシンボル(表現)もまた、その表現を含むすべての命題の形式を前提し、それを含む諸命題の集合を特徴づける共通の指標になるという(3.311)。さらに、その命題にも特徴指標(characteristic mark)となるシンボルがあり、その命題形式を決定する「可能性を開く」(*ibid.*)。かくして、意味は重層構造をなして命題を決定し、それは同時に命題の可能性を拡張することにもなる。

では、命題はどのようにその可能性を広げるのか。ウィトゲンシュタインによれば、シンボル（表現）は変数を用いて表され、命題は、そのシンボルを含む値（value）である（3.313）。したがって、ある命題の一つの構成要素を変項とした場合、可変的命題の「値」となる命題全体の集合が存在するのであり、その集合は、命題の構成部分に与えられた恣意的な取り決め（意味）に依存することになる。さらに、記号そのものをすべて変項とするならば、依然としてその値となる命題の集合が存在し、そのときには、もはやその集合はいかなる取り決めにも依存せず、ただ命題の本性的に関わるものとなる。ウィトゲンシュタインは、この命題の集合が、論理形式、論理的原型に対応する、という⁶。そして、それぞれの命題変項の値の確定は、この変項を特徴指標とする諸命題を列挙することで果たしうる（3.317）。ウィトゲンシュタインは、この値の確定について唯一本質的なこととして、「値の確定がシンボルの記述でしかなく、それが何を表しているかは一切述べないこと」（3.317）を挙げる。かくして、命題は、構成要素を変項とし、記号そのものを変項とし、そしてその値が内容を持たなくなることによって現実から遊離し、拡張される。

ただし、命題は単に拡張されるだけではない。何故なら、闇雲な拡張は誤謬の可能性も広げるからである。ウィトゲンシュタインは、命題に関する二つの両義性を指摘して、この誤謬を回避しようとする。まず、命題における記号の両義性である。記号とは、同じ記号において二つの対象を持つことも、二つのシンボルを持つこともある、「恣意的」なものである（3.321）⁷。それゆえ、同じ記号が命題の中で用いられて、異なった意味、異なったシンボルを示す場合がある。また逆に、異なる記号が同じ仕方で使用されている「かのような」見かけを持つ場合もある。ウィトゲンシュタインはここに、最も基本的な誤謬の種があるとして、従来の哲学が陥ってきた誤謬の元凶を見出す（3.324）。そして、彼は、誤謬を避けるためには、論理的文法（論理的構文論）を忠実に反映した記号言語を用いる必要がある、と主張する。「論理的構文論に則った使用によってのみ、記号の論理形式が定められる」（3.327）。

しかし、混同の種は他にもある。それは、命題そのものの両義性である。ウィトゲンシュタインによれば、命題には本質的な側面と偶然的な側面とがあり、その表記法にも恣意的な側面がある。そのようななか、本質的な側面のみが、命題がその意味を表現することを可能にする、とウィトゲンシュタインは言う（3.34）。彼は、本質的なものとして、同じ意味を表現しうるすべての命題が共有するもの、さらには同じ目的を果たすすべてのシンボルが共有するものを置き、それを本来の「名」と見なす（3.3411）。そして、その名がたとえ恣意的に決定されたものであれ、ひとたび決定されたならば、確定的なものとして機能し、他の名をも必然的な仕方決定づけることになる、という（3.342）。ウィトゲンシュタインは、ここに表記法の本質を見出す。この原子記号の恣意性と決定性は、パスカルにおける第一定理の恣意性と決定性に相似である⁸。あるいは、デリダが始源の欠如において指摘することとも重なる⁹。彼らに共通するのは、第一原理は恣意的で根拠を欠き、したがって正当化不可能だが、そこから出発してさまざまなものが十分に機能するというにほかならない。

写像の中間性

このように、命題は、その最初の記号の設定が恣意的であるところから出発し、この記号が対象の代わりをする（representatif）という原理に基づいて展開する（4.0312）。正しい記号言語とは、或る言語から他の言語へと翻訳できる規則を持つこと、すなわち翻訳可能性を持つことといわれることからしても（3.3411）、言語の世界は置換可能性によって成立しているといえる。こうしたウィ

トゲンシュタインの問題構制は、デリダの代補 (supplément) の理論に近似のものである¹⁰。ただし、ウィトゲンシュタインの場合、こうした命題の論理像は論理的足場に立脚するとして、命題は、論理空間全体の内にあるとされている。したがって、ウィトゲンシュタインにおいては、デリダの場合とは異なり、命題から成る言語の世界は論理の世界であり、その意味で、最初から有限性が確定している。ウィトゲンシュタインによれば、予見不可能な形式、構成不可能な形式を持つ命題は存在しない。彼にとっては、すべての要素命題が与えられたとして、そこからいかなる命題を構成しうるか、ということだけが問題なのである (4.51)。

では、命題は論理空間と、あるいは現実の世界といかなる関係にあって、その限界を確定されるのであろうか。ウィトゲンシュタインによれば、肯定命題は論理空間のうちにその領域を確定し、他方で、否定命題は否定される領域の「外側」にあるものを記述することによって、論理的領域を確定する (4.0641)。そのようにして、命題は権利上、現実をすべて描写しうる (4.12)。命題は、それが真である場合、事実がどのようなかを語る現実の像であり、我々はこれによって現実を「想像する」 (4.01)。我々は、新たな命題に出会ったとしても、命題記号の意味の説明なしでその意味を理解することができ、また、それが実際に真かどうかを知らずとも命題を理解することができる。それは、命題がたとえ実験的に構成されたとしても、論理形式を現実と共有して、論理像として現実の状況と本質的に結合しているからである (4.03)。

こうして論理世界と世界とは対応している。そのため、命題の描写と描写される状況とは同じように区分されて、両者には同等の論理的 (数学的) 多様性が認められることになる (4.04)。人はこの論理の写像の「多様性から外に出ることはできない」 (4.041)。また、論理そのものは記号では表されえず、したがって論理形式は表されることができない。「諸命題は論理形式を描写できない。論理形式は諸命題のうちに映されている」 (4.121)。論理形式を描写するためには、我々はその命題とともに、論理の外側に、世界の外側に立ちうるのでなければならないからである (4.12)。それゆえ、「示されうるものは、語られえない」 (4.1212, 強調はウィトゲンシュタイン)。

これらのことから、写像としての命題の中間的な性格が明らかになる。すなわち、その第一の記号の設定は恣意的かつ決定的である。そして、描写する状況の多数性に限界づけられている。さらに、論理の網の中にあつて、その網の目そのものを表すことはできない。こうした中間的な本質ゆえに、命題は現実を写すものではあるが、常に比較によって真偽を測られるものとなる。だが、逆説的にも、この中間的な本質ゆえにこそ、命題の意味は、それが事実かどうか依存することなく成立し、それ自体としては真偽という性質を指示しない (4.063)。命題が、意味を介することによってのみ現実に対応する一方、現実に対応せずともその意味が理解されるのは、この所以である。

閉じた論理の世界

さて、論理形式を語りうる外部が否定される一方で、命題の形式的関係や諸構造の「性質」や「関係」は、「内的性質」、「内的関係」 (internal relation) と呼ばれて肯定される。ただし、或る内的関係が可能な諸状況の間に成り立っていることは、その状況を描写する命題を通して、言語のうちに自ら姿を現すのみで、関係そのものを取り出すことはできないという (4.124)。

この「内的関係」のあり方を、ウィトゲンシュタインは次のように説明する。そもそも、要素命題は自ら自身の真理関数であり、命題に入力される真偽項である (5.01)。そして、入力される真偽項の真理・可能性のうち、特にその命題を真にする真理・可能性は「真理根拠」 (truth-grounds) と呼ばれる (5.101)。例えば、「 p が q から帰結する」という場合、一方の真理根拠が他方の真理根

抛に含まれるということであり、そのとき、「p」の意味は「q」の意味に含まれるという。この例は、神の創造の例にまで敷衍される。ウィトゲンシュタインは、「神が或る命題を真とするような世界を創造する」と仮定し、その際、神は同時にその命題から帰結するすべての命題が真となるような世界をも創造する、という(5.123)。このとき、先の例でいえば、命題「p」が真になる創造をすれば、命題「p」に関わる諸対象の全体を必然的に創造することになるのである、かくしてそこから帰結するすべての命題が肯定されることになる。

このように或る命題の真理性が他の諸命題の真理性から帰結する場合、それらの相互関係は内的なものであり、そのことを他の命題によって表す必要はない(5.131)。したがって、或る要素命題から他の要素命題が導出される「推論法則」は存在せず、「すべての導出はア・プリオリである」(5.133)。二つの命題を結ぶ外部はなく、推論を正当化する因果法則も否定される。「そのような推論を正当化する因果連鎖は存在しない」(5.136)。かくして、推論の法則も、因果法則も否定され、ただ、論理命題に内包される相互関係によって、命題から命題への移行が起こることになる。これがウィトゲンシュタインが「諸命題の構造は互いに内的關係のうちにある」(5.2)ということの意味であり、彼はここにおいて関係についての「内的であるか外的であるか」という論争に終止符が打たれるという(4.1251)。

だが、推論の法則も因果法則も存在しないとして、いかにして或る命題から他の命題がア・プリオリに導出されるのだろうか。ウィトゲンシュタインは、或る命題から他の命題が、論理的に意味ある仕方で作られることを「操作」(operation)と呼び、これによって内的關係が順序付けられるという(5.21)。それは、基底(base)となる命題と結果となる命題の双方の形式的性質に関わっている。操作は、或る命題から他の命題の形式へといかに移行しうるかを表し、諸形式の差異を表現する(5.24)。操作そのものは、あたかも加減乗除のように、それ自体は何も語ることなく、命題の意味を特徴づけもしない。ウィトゲンシュタインは言う。「ただ操作の結果のみが言明するものであり、そしてこれは操作の基底に依存している」(5.25)。操作は次々と結果を生み、さらにその結果を基底として操作が繰り返される。この反復を彼は「反復適用」(successive application)と呼ぶ(5.2521)。

このように、命題から命題への、いわば自動的な操作の反復適用によって、命題の基底が展開されていく。そうした操作の中でも、諸要素命題を基底とする操作が要素命題の真理関数の結果を導出するとき、この操作は「真理操作」(truth-operation)と呼ばれる(5.234)。その限りで、すべての真理操作は、要素命題の真理関数から、全く同じ仕方要素命題の真理関数を、すなわち命題を作り出す。「どんな命題も、要素命題への真理操作の結果である」(5.3)。このような相互内属的な関係においては、一つの命題が与えられるならば、その命題とともに、それを基底として持つ真理操作のすべての結果もまた与えられることになる(5.442)。その意味で、こうした諸命題の世界、換言すれば言語の論理の世界は、それ自体として展開はするが、同時に自己充足して閉じているといえよう。

論理の網の目と確率

さらに、この閉じた論理の世界へと分け入ろう。ウィトゲンシュタインによれば、論理において記号は本質的に必要であり、その記号は、それ自身の本質的特質によって自らを表す(6.124)。この性質により、一つの記号言語の論理的構文論には、論理学の全命題が内包され、「真なる」論理命題を予めすべて記述することが可能となる。こうした立論はカントの分析命題と同種であり¹¹、それゆえ「論理においては驚きは決してありえない」(6.1251, 強調はウィトゲンシュタイン)。つ

まり、閉じた論理の世界において、他なるもの、新奇なものが入る余地はない。論理は等号を本質としており、論理命題の証明において、或る論理命題を他の論理命題から作成するとは、最初のトートロジーから次々にトートロジーを、ただ記号規則に沿っていわば自動的に作り出していくことに他ならないからである。そして、二つの表現が等号で結ばれる際、その両者は互いに置換可能である。その限りで、「論理学の諸命題は何一つ語らない」(6.11)。こうしてトートロジーと置換可能性によって成立する限り、論理命題そのものがトートロジーであることを証明することもできない。「論理学においては過程と結果が同等である」(6.1261)。それゆえ、有意義な命題を論理的に証明することと、論理学における証明とは、全く別の事柄であることとなる。すなわち、有意義な命題は何事かを語り、その証明は正しさを示す。それに対して、論理学の命題は、証明の形式を与える、それ自身に対する証明そのものである(6.1264, 6.1265)。かくして、「論理学は学説ではなく、世界の鏡・像である。論理は超越論的である」(6.13)と言われる。

こうした論理学の本質と近似の本質を持つものとして、ウィトゲンシュタインは、論理学的方法の一つである数学的方法を挙げている。彼によれば、数学的方法の本質とは等式(equation)を運用することであり(6.2341)、等式を成り立たせる数学的方法とは代入(substitution)である(6.24)。つまり、等式は二つの表現の置換可能性を表現しており、さればこそ、数学の証明は、或る表現を別の表現へと置き換え、いくつかの等式から新たな等式へと進んでいく。こうしたことから、ウィトゲンシュタインは、論理の網(network)を純粹に幾何学的なものであり、その性質はすべてア・プリオリであると見なす(6.35)。ただし、その像の模様が幾何学的図形だとしても、その図形の実際の形態と位置づけについては、幾何学は何も語りはしない。

加えて、ウィトゲンシュタインは、数学的方法を用いる諸科学にも言及する。彼は、力学をいくつかの最小法則を持つもの、物理学をいくつかの因果形式の諸法則を持つもの、と特徴づける(6.321)。これらの諸科学はどちらも世界に投げかける異なる網の目であり、異なる世界記述の体系に対応しているのだという。ただし、幾何学の場合と同様、ウィトゲンシュタインは、これらが或る所定の形式を持った一つの網(net)によって像を描出し、特定の細かさを持った特定の網の目によって完全に世界を記述するとしても、それはその像についても、世界についても何も語らない、ということに注意を喚起する(6.342)。しかも、それらの諸科学のうちで働く帰納的探究の核心は、我々の経験と一致しうる最も単純な法則を適当と判断する点に存するが(6.363)、ウィトゲンシュタインによれば、この探究は何ら論理的な正当性を持たず、単に心理的に正当化されるに過ぎない(6.3631)。「最も単純なことが実際に現実化されるだろうなどという信念が何の根拠も持たないのは明らかである」(ibid.)。因果関係も未来予測も否定され、「或る出来事が起こったからといって他のことが起こる、などという強制は存在しない」(6.37)。存在する必然性は論理的必然性のみであり、自然法則を自然現象の説明とするのは信念に過ぎない。

ここに、論理学(あるいは数学)と他の諸科学との分岐点がある。他の諸科学と異なり、論理学の命題は経験から独立している。それゆえ、経験によっては論理命題を反駁することも確証することもできず、仮に論理命題が一般的妥当性を持つかに見えるとしても、それは偶然に過ぎない(6.1231)。また、論理命題は還元公理ではないから、我々の世界の現実が論理命題のようにあるのか、という問いとも関わりを持たない(6.1233)。逆に、還元公理が妥当しないものでも、論理的であれば思考可能である(ibid.)。

しかしながら、問題もある。このように自足し閉じた論理の世界は、経験世界から独立しており、諸命題は論理の網を現実的に投げ掛けるとはいえ、その論理像の真偽は現実と一致するか否かによっ

て測られる。或る命題が n 個の要素命題から成る場合、その命題の真理・可能性は、 2^n 通りでありうる (4.42)。そして、要素命題の真理・可能性との一致・不一致の表現が、各命題の真理・条件を表す (4.431)。ウィトゲンシュタインは、真理・条件の可能な組のうち、極端な場合としてトートロジーと矛盾を挙げる。トートロジーとは、要素命題のすべての真理・可能性に対して、その命題が必ず真となる場合である (4.46)。それは、現実を論理空間の無限の全体へと開いたままにする (4.463)。それに対して、矛盾とは、すべての真理・可能性に対して、その命題が必ず偽となる場合である (4.46)。それは、論理空間全体を埋め尽くし、現実一点の場所も与えない (4.463)。この正反対の二つの状況は、どちらも現実を規定する一切を失うゆえに、無意味である。「矛盾はいわば全命題の外側へと消え去り、トートロジーは全命題の内側へと消え去る」(5.143)。

だが、論理の網そのものが、トートロジーで成立する以上、それはア・プリオリで堅固なものである一方で、上記の無意味さにも晒されているということである。「論理学の諸命題は何一つ語らない」(6.11)、「実際には、我々は論理命題なしでやっていける」(6.122) というウィトゲンシュタインの文言は、論理命題が、諸命題のうちに内包されていて、いつでも示されうる、という以上のことを語っている可能性がある。事実、ウィトゲンシュタインは、このような確実性、可能性、不可能性のうちに、確率論の萌芽を見出している。

そもそも一つの命題は、それ自体で確からしいとか確からしくない、とは言えない。「出来事は起こるか起こらないかであり、その中間はない」(5.153)。ウィトゲンシュタインは、論理的推論の確実性を確率の一方の極だと述べるが、それは、論理的推論は確実であり、出来事の生起から独立しているからである (5.154)。したがって、出来事の生起を問題にするならば、推理法則も因果法則も届かぬゆえに、確率が必要となる。「確実性がない場合にのみ、我々は確率を用いる」(5.156)。ただし、世界の事実は、論理写像と論理を共有しているからには、我々は「その事実の形式について何らかのことは知っている」(*ibid.*, 強調はウィトゲンシュタイン)。この両義的な状況のなか、確率とは、命題が本来表している状況から離れた状況において、不完全な像を一般化し、或る命題形式に対して一般的記述を与えることなのである。

第三節 論理の破れ目

ウィトゲンシュタインは、こうした閉じた論理の状況を指して、「論理はあらゆるものを包括し、世界を鏡のように映し出す」(5.511) と言う。もっとも、諸科学が異なる論理の網の目であり、言語が他の言語に翻訳可能であることからすれば、任意の使用言語が特殊な網の目に過ぎないことも確かである。ウィトゲンシュタインもそれに同意して、論理を特殊なかぎ針と特殊な編み方に準える。彼によれば、それらが互いに組み合わさって、限りなく細かい網の目が、巨大な鏡が、作り上げられるのだという (*ibid.*)。それゆえ、「十全に一般化された命題によって、世界を完全に記述することができる」(5.526)。そして、この一般化された命題は、すべての命題と同様、要素命題から合成されたものであるゆえに、要素命題の総体によって課される世界の構造の可能な範囲を限界づける (5.5262)。その限界の端にあるものが、確率論であり、確率の命題もまた一般化されて論理の世界へと回収されていく。

しかし、まさにその確率を要する事態こそが問題である。「確実性がない場合にのみ、我々は確率を用いる」(5.156)。この文言には、いくつかの謎、あるいは示唆が含まれている。まず、ア・プリオリな論理の網の目と、世界との間に齟齬の可能性があるという事実、そして、そのこと

が「我々」をして確率を要請せしめるということ、である。とりわけ、後者では、これまでも折に触れ指摘してきた、論理と世界の間にあつてその一致・不一致を判断する主体がはっきりと示されている。それゆえ、ウィトゲンシュタインが言う通り、「世界は論理で満たされる、世界の限界は論理の限界である」(5.61)ののだとしても、「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」(5.6, 強調はウィトゲンシュタイン)のかどうか、それが次の課題である。

そこで、この最終節では、主体を含む、世界の限界の外側について考究する。まず、言語の諸命題そのもののうちにある、世界の外への志向を見出す。そして、ウィトゲンシュタインが意外にししばしば口にする「私」「我々」という一人称と、わずかに言及する「主体」という文言から、「この本で論じられえない唯一のものとは、主体である」(5.631)の真意を炙り出す。そして最後に、言語の世界と、それと「同一視される」私の世界の限界の破れ目を追究する。

限界の内と外

閉じた論理の世界の内では、すべてが一挙に与えられる。「対象が与えられるならば、そのとき同時にすべての対象が与えられる。要素命題が与えられるならば、そのとき同時にすべての要素命題が与えられる」(5.524, 強調はウィトゲンシュタイン)。また、「もし一つの基本概念が導入されたならば、それは、その概念が一度でも現れるすべての結合において、導入されていないなければならない」(5.451)。既に見たように、論理学の命題はトートロジーで組み立てられており、トートロジーは論理空間全体を占めて、その命題すべてを真とする。それゆえ、論理学の命題は、言語の、世界の、形式的論理的性質を示すのみであり、「論理学の諸命題は何一つ語らない」(6.11)。他方で、「論理においては、可能なものは何でも認可されている」(5.473)以上、「或る意味で我々は、論理において誤ることはありえない」(*ibid.*)。論理が自己展開、自己完結する限りは、「論理においては自明性は無用の長物である」(5.4731)。

しかるに、この閉じた論理の世界に綻びの種はある。それは、否定の作用である。想起するならば、ウィトゲンシュタインは、肯定命題については、論理空間の内にその領域を確定し、否定命題は否定される領域の「外側」にあるものを記述することによって、論理領域を確定する、としていた(4.0641)。否定は真理関数の操作の一つとして、命題の意味を反転させ(5.2341, 括弧内)、その意味をただ一つ定める。なぜなら、或る命題の外側を限なく占めるような命題は一つしかないからである(5.513)。

さらに興味深いのは、ウィトゲンシュタインが、否定命題を肯定命題の派生としてではなく、肯定命題のうちに含まれているものと考えることである。「否定命題の可能性は、肯定命題のうちに既にかき込まれている」(5.44)。彼によれば、否定命題は、肯定命題を通して間接的に構成されているのであり、「肯定命題は否定命題の存在を必然的に前提とするし、逆もまた真である」(5.5151)。否定命題は肯定命題と相互内属的な関係にあつて、両者は同等の存在論的な意義を持つ。しかも、否定が真理関数の操作の一つである以上、いったん論理命題のうちに導入されれば、あらゆる形式命題において否定は理解されねばならない(5.451)。

以上の否定の作用は、論理領域の外部を示唆するだけでなく、それを表現する手段を与える。ウィトゲンシュタインは、否定を含む論理記号の導入に関して、注意深く、それが一貫して用いられる場所を問う必要を指摘している(5.452)。しかしながら、まさにその論理の世界を肯定する、つまり論理の世界の内的関係を主張する命題のうちに、権利上、否定命題が前提とされ、その否定命題がただ一つ決定されて論理領域を確定するのであれば、ウィトゲンシュタイン自身の主張にも敷衍

して、「論理領域でないもの」を志向することは可能である。これは、実のところ、否定神学的手法である。それは、デリダが『名を救う』において、シレジウスを引きつつ、現代に通じる言語論的な可能性として提示したところのものなのである¹²。

主体の問題と独我論の可能性

こうして論理領域の外部の可能性に歩を進めたところで、これまで何度か示唆してきた「主体」の問題の検討に入ろう。主体が問題となったのは以下の文脈においてである。まず、論理像が世界の写像であるという場合、像の真偽は、世界の実事との一致・不一致によってなされると言われた。しかし、真偽とは誰にとって必要な判断なのか、一致・不一致の判断を誰が行うのか、が問題となる。また、命題の確定のくんだり、ウィトゲンシュタインは、命題の分析が完全になされる可能性を示した上で、その解明が記号の意味を「既によく知る人によってのみ」なされると言明していた(3.263)。ここでは、解明の主体が明示されるのみならず、その経験値にまで言及されている。さらに、因果法則が否定され確率が必要とされる場面については、「確実性がない場合にのみ、我々は確率を用いる」(5.156)。この裏面には、出来事を予測したり、推論を正当化したりする因果法則が否定されるにもかかわらず、それを信じる主体が隠れているように見える。「因果連鎖(causal nexus)を信じること、これこそ迷信以外の何ものでもない」(5.1361)。ここでも、因果法則を「信じ」、確率を「用いる」主体のごときものが論理の世界の外に設定されているように思われる。

しかし、ウィトゲンシュタイン自身は、主体＝私を、世界の中に限定する。「或る事態が思考可能である」とは、我々がその事態を像として表わしうる、ということであり(3.001)、その像が論理形式に基づく限り、その思考は論理命題の圏域に限定されるからである(3.032)。そして、論理命題の総体が言語である以上、「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」(5.6, 強調はウィトゲンシュタイン)のは必定である。論理が内的関係において充足して世界から独立し、我々はその論理の世界の内側にいる限りにおいて、世界の事物の存否について何かを言うことは不可能だからである。それを言うためには、世界の外部に身を置かねばならないが、(ウィトゲンシュタインに従えば)我々は論理の外部に出られないのだから、思考しえぬことを思考することも、語ることもできない。我々の思考と論理の関係は循環し、我々は論理の世界の内部に閉じ込められるばかりである。ウィトゲンシュタインは、ここに独我論(solipsism)の正しさの鍵を見出す(5.62)。

確かに、論理写像の世界と私の思考とが一致する限り、「世界は私の世界」であり(5.62, 強調はウィトゲンシュタイン)、「世界と生とは一つのもの」(5.621)であり、かつ「私は私の世界」(5.63)であろう。ただし、より正確に言うならば、このとき、もはや「私」と言明する必要はない。世界と一致する「私」しかおらず、語るのは私であり、私が語るのは私の世界でしかないのだから、外延も内包も消失するからである。それゆえ、論理の世界がそれ自体で独立して展開する限りで、「思考し表象するような主体は存在しない」とウィトゲンシュタインが結論するのは当然である(5.631)。独我論は必然的なものとなり、世界の事物と私の世界は一致するゆえ、独我論の自我は広がりのない点にまで縮減し、「独我論をその含意までも厳密に突き詰めると、純粋な実在論と一致することが見られうる」(5.64)。それゆえ、自我の死は世界の終わりを意味することになる。「死によって世界は変わることなく、終わりを迎えるのである」(6.431)。

主体の生と価値の世界

しかしながら、ここで注意しなければならないことがある。というのも、「私」と「私の思考」(あ

るいは「思考する私＝コギト」は等号で括られるとは限らないからである。実際に、ウィトゲンシュタインは、「自我」(self)を想定し、これを人間ではなく、人間の身体でも、心理学で扱われる人間の心でもはやない(5.641)、として、それを哲学的自我、すなわち世界の限界としての形而上学的主体 (metaphysical subject) と位置づけている (*ibid.*)。この形而上学的主体について、ウィトゲンシュタインは、「主体は世界には属さない。それどころか、主体は世界の限界である」(5.632)と云う。彼によれば、眼が見ている眼それ自身を見ることができないのと同様、そして視野の内のいかなるものも眼によって見られていることを推論できないのと同様、主体は世界には属さないのである (5.633)。

そこで次のように考えることが可能である。すなわち、もし、この形而上学的主体が「思考する私」なのであれば、それは、論理命題の総体が言語であり、そのうちの有意味な命題が思考である (4) という定義から逸脱する。あるいはもし、その主体が「思考する私」そのものから逸脱しているのであれば、それは、ウィトゲンシュタインの言に反して、論理命題の総体の外側に位置づけられることになる。

実のところ、後者の可能性は否定できない。その理由は四つある。

まず一つ目は、諸学の論理の網の目という、論理世界の側から提起される。ウィトゲンシュタインは、数学を論理を探究する方法とし、その本質を、等式を運用すること、すなわち代入によって或る表現を別の表現へと置き換える置換可能性、と見なしていた。(6.24)。同時に彼は、等式が、二つの表現を検討する「観点」を指し示すに過ぎず、意味における等しさという「観点」を提供するに過ぎない、ともいう (6.2323)。しかも、数学が「論理を探究する方法」を示すというときには、別の方法、すなわち別の観点もまた想定されている。例えば、物理学や力学という観点がそれである。ウィトゲンシュタインは、これらは、すべて世界に投げかける異なる網の目であり、世界を記述する異なる体系に対応しているという (6.341)。だが、思考が論理世界に張り付いているのだとしたら、こうした「異なる」網の目をいかにして「異なる」ものとして区別するのであろうか。それらを区別するためには、複数の網の目を外から比較する視座が不可欠であろう。

二つ目は、生の問題である。ウィトゲンシュタインは、数学をはじめとする諸科学について、それらがありうる科学的問題にすべて応えるとしても、「生の問題は全く手つかずのままであろう」と述べている (6.52)。生の問題が解かれるとすれば、それは、問題の消滅、すなわち死によってでしかない、と彼は言う (6.521)。こうして、生は論理の網から零れ落ちる。「時間と空間の内にある生の謎の解決は、時間と空間の外にある」(6.4312, 強調はウィトゲンシュタイン) また、「ここで求められているのは、自然科学の問題の解決ではない」(6.4312, 括弧内)と云われる限りで、主体の生の問題は論理空間の一端を担う諸科学の外にある。論理空間内の命題は、「世界が何であるか」、「世界はあるのか」については何も語らず、「世界がいかにあるか」についてのみ語るに過ぎない。それゆえ、そうした命題が語ることは、より高い、生について、神についての問題の次元からすれば、完全にどうでもよいことだ、とウィトゲンシュタインは断じる (6.432)。

三つ目は、意志の問題である。既に、因果法則を信じ、確率を求める際、我々は主体の意志の独立が示唆されるのを見た。ウィトゲンシュタインは、世界と論理写像を繋ぐ我々の信念を否定する一方、未来の行為を知ることができないことについて、ここに「意志の自由がある」(5.1362)と捉えている。彼は、現実世界とそこに掛けられる網の目としての論理世界とを峻別するが、同時に私の意志もそれらから切り離す。「世界は私の意志から独立している」(6.373)。たとえ意志が世界で実現されたとしても、それは偶然であり僥倖に過ぎない。なぜなら、「意志と世界の間にはそれを

保証するいかなる論理的連関も存在せず、そして意志と世界の間には何らかの物理的連関を想定したとしても、その物理的連関それ自身を意志することはもつとできないからである」(6.374, 強調はウィトゲンシュタイン)。この文言からすれば、意志は、仮に言語による思考によって描かれた像であったとしても、現実世界と論理世界の双方を比較し、それらを繋ごうとして繋げないものである。だとすれば、意志は、偶然が支配する現実世界から独立しているのみならず、「思考」することにおいて論理的必然性の支配する論理の世界に軸足を置きつつも、そこからも遊離している可能性がある。

そして四つ目は、まさに独我論を主張すること自体においてである。先に、否定命題は肯定命題に内包される、というウィトゲンシュタインの記述を見た。これを文字通り受け取れば、独我論もまた否定に晒され、独我論を肯定する議論が占める論理領域とその外部を同時に示唆しうることになる。だが、それよりもっと確からしいのは、「世界は私の世界である」(5.62, 強調はウィトゲンシュタイン)、「主体は世界には属さない。それどころか、主体は世界の限界である」(5.632)、と云われて形而上学的主体の存在がいわば裏面から確保される一方で(5.641)、我々の経験のいかなる部分もア・プリオリではない、として、我々が見るもの、記述するものはすべて「別様でありうる」(5.634)と言うウィトゲンシュタイン自身の地歩の外部性である。その「別様」がいかなるものかは、例によって示されない。しかし、彼が「別様でありうる」という可能性を指摘するとき、その視座がどこにあるのかを問うことはできる。そして、別様の記述の可能性を指摘する以上、私の他のあり方、あるいは私ではない他なるものの存在、さらには私と同様の世界を持ちうる他なるものの視点を考える。ここには、ウィトゲンシュタインの著作では主体以上に語られることのない「他者」の存在が透けて見える。そう考えると、ウィトゲンシュタインの言う、「ものにはア・プリオリな秩序は存在しない」(*ibid.*)という文言も、私と他者(そもそも「私」という言葉自体が、他のものとの区別を前提していることを示している)がそれぞれ独我論を個別に成立させていることからの還元公理である可能性すら浮かぶのである。

このように考えると、形而上学的主体は、いわゆる「思考する主体」に限定されることなく、世界から独立している可能性がある。そればかりか、形而上学的主体は、論理世界に足場を持ちつつも、そこからも遊離している可能性が浮き彫りになってくる。さらに、ウィトゲンシュタインによれば、世界の意義そのものも、世界と論理の外部にある。「世界の意義は世界の外になければならない。世界の内ではあらゆるものはあるようにあり、あらゆるものは起こるように起こる。世界の内には価値(value)は存在しない」(6.41, 強調はウィトゲンシュタイン)。彼は、仮に世界の内に価値があるとしたら、それはもはや価値ではない、と言う。その理由として、ウィトゲンシュタインは、現実に生起するもの、今あるものはすべて偶然であることを挙げている(*ibid.*)。偶然でないものは世界の内にはなく、世界に入ったものは偶然に墮すという。ここでウィトゲンシュタインは、現実の経験の偶然性と、価値の普遍性を対比させており、後者として、善のアイデアのごときものを想定しているといえよう。したがって、倫理のような「高い次元」は世界の外に出される。すなわち、「倫理の命題は存在しえず」(6.41)、言い表すこともできず、「倫理は超越論的である」(6.421)。そして、倫理的なものの担い手たる意志もまた、語りえないものとして、現象としての意志とは区別され、善き意志も悪しき意志も、言語で表現しうるもの、すなわち世界の事実の変化には関わらず、ただ世界の限界の変化のみに関わることになる(6.43)。「[そのような意志によって]、世界はすっかり別の世界へと変化しなければならない」(*ibid.*, 補足は引用者)。このくだりはむしろ、実存主義的な見地といってよい。あるいは、世界全体が別世界に移行するあたり、宗教的な回心の境地す

ら想起させる。

超越と隠れたる神

かくして、主体も、意志も、そして倫理も価値も、世界の内で、あるいは言語において明示されることはない。世界は閉じており、それと外延を同じくする「私」も閉じているということは、「問いが立てられうるのであれば、それに答えることは可能である」(6.5, 強調はウィトゲンシュタイン)ということにも表れる。私は世界と言語の内に閉じ込められて、そこから外部に出ることはない。つまり、我々は世界も論理も超越することはできず、それを表現することもできない。

しかしながら、ウィトゲンシュタインが目指す「世界の限界づけ」そのものが、最初からその表裏としての超越を暗に示している。超越を臨みえないのであれば、限界づけは不可能であり、不要でもあるからである。ウィトゲンシュタインは、言語は世界が「いかにあるか」を表しうるだけであり、「何であるか」を語ることはできない、と繰り返す。逆に言えば、彼は「何であるか」を「いかにあるか」の上位に置き、それを言語の世界から超越させているのである。ウィトゲンシュタインは、世界の存在そのものを「神秘」(mystical)と称し、「限界づけられた全体として世界を感じること(feeling)」も同様に「神秘」と称している(6.45)。眼は眼を見られず、視野はそれ自身の内にあるものしか見ることができないにもかかわらず、この世界が限界づけられていることを知る。だが、思考の言語が世界から出られない限り、それは論理や言語とは別の仕方によってでなければならぬ。ここに「感じること」という、これまで見られなかった文言が唐突に挿入されていることは興味深い。語るのではなく思考することでもなく、世界の限界を超える可能性としての「感じること」が示唆されているのである。

それゆえ、明らかに世界の外部である神に、ウィトゲンシュタインがわずかに言及する際、それを次のように述べるのは道理である。「神は世界の内には現れない」(6.432)。「隠れたる神」とは、パスカルやカントにおいて倫理的要請とともに示される重要な概念であるが、ウィトゲンシュタインにとっては、神とは原理的に「隠れたる神」でしかありえない所以である。いずれにせよ、超越の臨界点である世界の限界について、すなわち、主体、神、世界の限界、存在について、ウィトゲンシュタインは等しく「神秘」と呼び、「言葉にできないものは存在する。それは示される。それは神秘である」(6.522)と言うのである。

ウィトゲンシュタインは、こうして形而上学的な事柄を「神秘」として一掃しつつ、哲学の正しい方法は、こうした命題の記号に何ら意味を与えなかった、と常に指摘することだと言う(6.53)。それゆえ、次のように結論される。「語りえぬものについては、沈黙していなければならない」(6.54)。

おわりに

こうして、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の、「世界の限界」と「語りえないもの」を念頭に置きながら、そこからいわば逆算して、論理の世界の内側から世界の限界を確定し、その彼方を臨むことはいかに可能かを考察してきた。

ウィトゲンシュタインは、諸科学が「いかにあるか」については語るが、「何であるか」という存在そのもの、そして存在の価値、さらには生の問題や倫理については何も教えないことを受け、それらを写像理論の世界の外部に置く。彼は、それらを「超越論的」「超越」「神秘」として、その境界の確定までを哲学の仕事として、それ以上は「語りえない」として沈黙することを選ぶ。その

境界まで肉薄するために、彼が採用したのは言語を明晰にすることである。その過程で、現実の世界にかける論理の網の目としての幾何学的言語が描出されたのである。現実の世界と言語の世界とは、モノと写像の間で論理形式を共有するが、それぞれ独立しており、それゆえに言語世界における命題は、置換可能性と等式によって自動的に拡張していき、それ自体がア・プリオリで理解可能であるとされる。言語世界の端緒は、対象に「名を与える」ことであり、その恣意性と決定性は、パスカルにおける第一原理の恣意性と決定性と相似のものである。つまり、論理の世界は、根拠のない宙吊り状態にある。原理におけるこうした中間的傾向は、「転向」を果たした『哲学探究』ではいっそう先鋭化され、そこでは根本原理の正当化不可能が明言されることになる¹⁴。

他方で、言語の世界の論理構造において、因果法則をはじめとする推算法則は、隠れた主体の「信念」に過ぎないものとして否定される。また、議論の中で「私」が明示されたとしても、それすらもその思考において論理世界の構造のうちに組み込まれる。論理の網の目は、世界に過不足なく掛けられるア・プリオリなものである一方で、わずかにその限界が「感じる」ことによって知られる。そして、実は、隠れた主体の意志が、現実世界からも論理世界からも逸脱し、双方の突端に位置するものとして宙に浮きつつ、論理の網の目を掻い潜って世界を変化させる。つまり、意志は、主体そのものと異なり、必ずしも隠蔽されるのではなく「自由」と肯定的に捉えられた上、その「信じる」作用と「世界を別様に变化させる」任を担う。これは、写像理論からの逸脱であろう。

こうした逸脱がおそらくは自覚されればこそ、ウィトゲンシュタインにおいては、論理空間と現実世界の真偽を確かめるべくそこから遊離する可能性のある主体は、隠されるほかない。「隠れたる主体」については、ヒュームのように、因果法則の否定および自己同一性の否定から導出されると考えることも可能であろう。しかし、そうと言い切れないのは、ウィトゲンシュタインにおいては、諸科学を結びつけるものとして、同一の主体が想定されているように見えるにもかかわらず、それが隠されているからである。では、フーコーの言う「主体の死」に呼応しているのかといえば、おそらくそうでもない。というのも、少なくともこの著作において主体の問題、特に主体の意志の問題が論じられるのは、超越論的な倫理のトピックに関連してであり、その点からすれば、むしろパスカル的なキリスト教道徳あるいはカント的な倫理学に近い地歩にあると考えられるからである。

そうだとすれば、ウィトゲンシュタインの議論そのものとは裏腹に、写像理論は、「限界を感じる「私」によって限界の外部を臨みつつその内部に留まるという「神秘」の上に構築されていることにもなる。ウィトゲンシュタインは、主体は世界に属さないといいながら、その主体を隠すことによって露わにし、さらに自分自身も自らを「私」として議論に登場させ、写像理論を開陳し、世界の限界を規定する限りで、ウィトゲンシュタイン自身の議論を裏切っているようにも見える。だが、まさに、ここにおいてこそ、彼自身の限界と神秘が存するのであり、その地歩をいかに正当化しうるかということこそが、哲学の問題として問われるべきなのである。

- ¹ 次作の『哲学探究』では、例えば次のように述べられている。「言葉の使い方についての規則のシステムを、特別な仕方で明示したり完全なものにしたりしようとは思わない。というのも、我々が目指す明晰さとは完全な明晰さなのだから。それはただ、哲学の問題は完全に消え去るべきである、ということだけを言おうとしているのである」。
- Ludwig Wittgenstein, *Recherches philosophiques*, Éditions Gallimard, 2004, 133. 強調はウイトゲンシュタインによる。
- ² Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, 1961. 以下、この著作からの引用、参照個所については節番号を記す。この著作からの引用、参照個所については節番号を記す。
- ³ 内的な性質とは、或る対象がそれなしでは考えられないものであり、命題に後から付与したり、そこから剥奪したりできないものである (4.124)。
- ⁴ Michel Foucault, *Les mots et les choses : une archeologie des sciences humaines*, Éditions Gallimard, 1966, p.36.
- ⁵ *Ibid.*, p.396.
- ⁶ これは、比例式や定言命法のごときものを指すであろう。
- ⁷ ここでウイトゲンシュタインは、日常言語においては、同じ語が異なった仕方で表現して、異なったシンボルを持つことの多いことを指摘し、次作への片鱗を見せているが、その指摘の方向は逆向きである (3.323)。
- ⁸ Blaise Pascal, *De l'esprit géométrique et de l'art de persuader*, Œuvres complètes, Éditions Gallimard, 1954, p.592-602.
- ⁹ Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Les éditions de Minuit, 1967, p.226.
- ¹⁰ *Ibid.*, p.208.
- ¹¹ ウイトゲンシュタイン自身も、このことを指摘している (6.11)。
- ¹² Jacques Derrida, *Sauf le nom*, Éditions Galilée, 1993.
- ¹³ Lucien Goldmann, *Le Dieu caché*, Éditions Gallimard, 1959.
- ¹⁴ 拙論、La justice en suspens : Jeux de langage chez Wittgenstein et son dehors, 『岐阜聖徳学園大学紀要 <教育学部編>』第60集、2021年、p.19-p.35.